

諦忍律師自筆の『空華談叢』の確認

川口高風

がめてみると、安永九年（一七八〇）頃の『八事山諦忍和尚年譜』には、

○師年来答^{ハク}客所問^{キヤクソモン}而時々所^シ筆記^{シテ}委^ニ篋中^ニ儒^ニ佛^ノ典籍^ノ内^ニ估^シ屈^ス敷^ク牙^ヲ者^ト及^シ和^漢故事^ノ諺語^ヲ本^ノ説^ニ来^リ歴^ス等^積積^ニ四十^ニ余年^ヲ而^{シテ}都^ル成^ル七^ノ軸^ト。題^ト曰^ク空^ノ華^ノ談^ノ叢^ト。門^ノ下^ノ諸^ノ子^ノ胥^ノ議^ス有^リ上^ノ木^ノ之^ノ拳^ト。

とあり、『八事山第五世和尚行業記 下巻』にも

師年来僧俗の所問に答所筆記して篋中に委^ニ儒^ニ佛^ノ典籍^ノの内^ニ估^シ屈^ス敷^ク牙^ヲなる者及び和漢の故事諺語の本説来歴等積て七軸と成る。題して空華談叢と云。諸人胥議して上木の拳を成す。前編四冊刻成て世に行之。後編今既に上木を

拳す。

諦忍（一七〇五—一八六）の著作の一つに『空華談叢』がある。内容は仏教や世俗の事例について僧俗の間に諦忍が答えたもので、問答形式になっており、片仮名交り文である。四巻四冊で総数二二六項目の問答がある。編集方針は全く無原則的に配された随録集で、奥付によれば、天明六年（一七八六）正月に皇都書林梶川七良兵衛、河南四郎兵衛、沢田吉左衛門、山田卯兵衛より刊行されている。したがって、諦忍の遷化する半年前に刊行されたものと思われる。

本書は『大日本仏教全書』第一四九巻（大正元年十月 仏書刊行会）に所収されているが、それ以前の明治三十一年八月には各宗実益布教文庫の第五篇（鴻盟社発行）にとりあげられて翻刻されており、明治期仏教において布教方法の参考資料として重視されたようである。

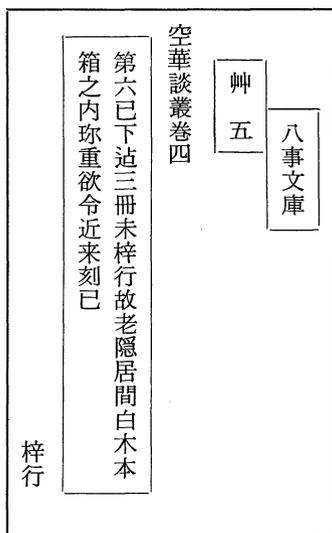
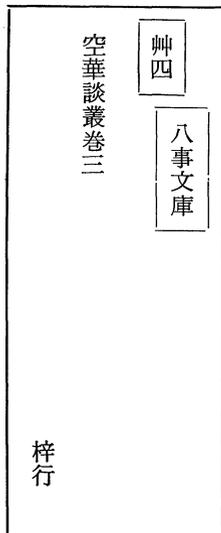
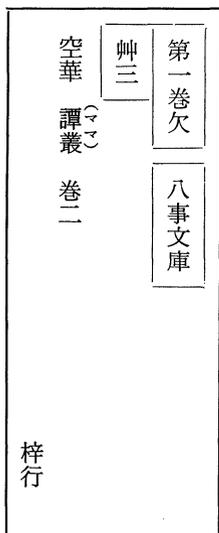
さて、諦忍の伝記資料より『空華談叢』に関する記事をな

とあることから、安永九年に四十年來、僧俗の間に答えたものを筆記して篋中に入れていたものの七軸を『空華談叢』と称して上木したという。特に『八事山第五世和尚行業記 下巻』によれば、七軸の中、前編四冊は印刻が成り世に広まっていることをいい、後編は現在、上木しているという。そのため安永九年は前編の四冊のみしか刊行されておらず、現在

でもその四冊の木版本のみしか存在しない。しかし、諦忍の伝記資料よりみれば、『空華談叢』の原稿は七冊存在していたということができるのである。

二

八事文庫に所蔵する『空華談叢』は、「東山・四十四・レ・十六」に巻二が欠本している四卷三冊と「西山・四十八・写・一二九」の巻二、三、四の自筆原稿の三冊がある。自筆本の表紙をみると



とあり、 で囲った部分の朱書は明治十一年八月に興正寺(名古屋市昭和区八事本町)十四世慈宝覚玄が八事文庫の蔵書を整理した時に書かれたものと思われ、すでに当時は第一巻が欠本となっていたようである。しかし、巻四の朱書にいうように、艸六より艸八迄の三冊すなわち巻五、六、七の三冊は未梓行で、その原稿は諦忍の居住していた居間の白木の本箱の内に珍重されており、近々印刻が終ることも記されている。したがって、明治十一年頃には第一巻を除く自筆本が八事文庫に所蔵していたことが明らかにになり、それ以後、巻五、六、七の未梓行原稿が行方不明となったのである。

最近、その未梓行原稿が仏教大学図書館に所蔵することが明らかになった。『仏教大学図書館蔵仏教関係古書目録稿』(平成元年十月 仏教大学図書館)九十九頁に

空華談叢卷五、六、七存三卷

諦忍撰

諦忍自筆 〔天明六（一七八六）以前〕写

三冊 九冊 和

草稿本 未刊

堀尾貫務寄贈

と紹介されており、本書をみると、まったく八事文庫蔵本に
続く自筆本であった。表紙には

空華談叢卷五

以下未板行

梓行

空華談叢卷六

未板行

梓行

空華談叢卷七

未板行

梓行

とあり、卷二以下同様、梓行する予定であったが、卷五、六、七は未板行であったことが記されている。そのため八事文庫蔵本と仏教大学図書館蔵本の自筆本は本来、興正寺の諦忍の居間の白木箱に珍重されていたものであったのである。

では、なぜ仏教大学図書館に所蔵されることになったのであろうか。詳しい経由は明らかに出来ないが、仏教大学図書館蔵本の各巻の表紙には明治三十三年十二月に堀尾僧正より寄贈されたことの書かれたシールが貼られているため、同年に堀尾貫務僧正より寄贈されたものであることが明らかになる。当時の堀尾貫務は百万遍知恩寺六十三世で浄土宗専門学院院长にも就任していた。出身は尾張国海部郡佐屋町で尾張の養蓮寺、寿経寺、養林寺、高岳院などにも住持した人である。したがって、覚玄が八事文庫を整理した明治十一年八月以後に堀尾貫務が入手し、それを同三十三年十二月に仏教大学図書館へ寄贈したものと考えられるのである。

『空華談叢』の諦忍自筆本の確認により、従来刊行されている巻一より巻四迄の構成の相違や内容のまったく知られていなかった巻五、六、七が明らかになった。また、『空華談叢』は自筆本以外に別に七巻七冊の写本が龍谷大学図書館に所蔵する。それは請求番号二〇四一・七・一一七で、外題は「空華譚叢」とあり、内題は巻一のみ「空華譚叢」とあるが、他巻はすべて「空華談叢」になっている。巻一の最初には大

とあげ、『幽林清話』の小引が二十年であったのを五十年と改めて刊行することをいう。巻四には天明二年五月に刊行の顛末を記した門人等の

本師老和上負三剛明卓拔之識一剖割千古之疑兜ニ若三庖丁解牛。砒然驕然恢恢乎有ニ余地一矣。從來所述之書數十部既刊行ニ于世。其言皆出ニ為法為人之赤心ニ実為レ金ニ湯覺王門一者也。今此一軸者平素所答ニ客問ニ而外尽ニ西之秘ニ内潤ニ三藏之海綿ニ歷四十余年一而始成矣。和上桑榆既逼以故吾僭拜請將レ与ニ劄牘氏一聊記顛末一耳。後学若挟ニ這一軸於案頭一則免ニ臨ニ事猶予之憂。則不レ無小補ニ云。

天明二年夏五月

門人等敬識

とある跋を付して刊行した。したがって、草稿の成った延享二年より四十年を経た天明二年に印刻が始まっており、構成の順序や内容なども変わったのである。

次に、『幽林清話』と『空華談叢』の自筆本及び龍谷大学図書館蔵本、木版本などの項目数をながめてみると、

		木版本	42
		龍大写本	41
		自筆本	55
		幽林清話	33
卷1	33		
卷2	39		
卷3	53		
卷4	70		
卷5	58		
卷6	64		
卷7	47		
計	364	355	410

諦忍律師自筆の『空華談叢』の確認(川口)

となり、『幽林清話』は『空華談叢』の草稿であることが確かにいえる。そして『空華談叢』に至り、項目が増加したのは編集した門人たちによって増補されたためと考えられる。

1 『日本仏教典籍大事典』(昭和六十一年十一月 雄山閣出版)

一二九頁の『空華談叢』項。

2 拙編著『尾張八事文庫書籍目録』(昭和五十三年十一月 第一書房)の「八事文庫の歴史」で覚玄が整理したことを明らかにした。

3 大橋俊雄『浄土宗仏家人名事典―近代篇―』(昭和五十六年十一月 東洋文化出版)一五〇頁の堀尾貫務の項。

(本稿は平成七年度文部省科学研究費一般研究Cによる研究成果の一部である。)

〈キーワード〉 諦忍、空華談叢、幽林清話

(愛知学院大学教授)